後　記

田村次朗先生の学問的な業績や幅広い関心も手伝って、多くのゆかりある人々の寄稿を得、このたび「法学研究田村次朗先生退職記念号」が無事刊行されました。

思い起こせば、田村次朗先生との出会いは、わたしが大学院の修士課程に進学した一九九三（平成五）年の秋だったと記憶しています。先生は、米国のシンクタンクや大学で二年半の在外研究を終え、帰ってきたばかりで、海外からの息吹を感じさせる独特の熱気をまとっておりました。

初めてお会いした日、月曜日の五・六時限目に設定されていた大学院の社会法合同演習で、居並ぶ大先生たちを前に、潑剌と帰朝報告をされていた姿がなんとも印象的でした。たしか、そのあとに催された三田・華都飯店での会食の際、当時、わたしの指導教授であり、田村先生も指導を受けていた金子晃先生（現名誉教授）が田村先生にわたしのことを紹介され、先生にご挨拶したのが最初だったと思います。

その後は、折々さまざまな場所で指導を受け、相談にものっていただきました。先生の指導は、瑣末なところを細々と指摘するのではなく、おおらかに話や議論の筋をよく聞いてくださり、そのうえでうまくまとまる方向へと一緒に考えてくださる、そんな感じでした。結論を急かすのではなく、自分自身で考えさせる一方、議論のプロセスの中で、本人のささやかなアイディアに気づき、それを上手に引き出してくれる。

法学部法律学科において田村ゼミナールは、ディベートを早い段階で導入し、その闊達な議論と活動で有名ですが、わたしから見た田村メソッド（指導法）の本質は、実は学生たちの自律性に期待した「待ち」の指導ではないかと思っています。このような指導法は、我慢強くなければならず、せっかちではいけません。また、学生に対する深い信頼がなければ成り立たないものです。

目次をご覧いただければ分かりますが、この論文集の執筆者には、研究者はもとより、多くの実務家も名を連ねています。そして、その中の少なくない数が、田村ゼミナールの出身者です。田村先生の学生に対する信頼の指導が、多くの俊英を生み出し、学会や実務界に貢献していることは紛れもない事実であることを、くしくも本論文集は証明

しているといえるでしょう。

二〇二三年一二月

法務研究科教授　石岡克俊